

「せとうち発見の道」企画展

「ハンセン病問題と瀬戸内市

お く な が し ま お お は し
～邑久長島大橋30周年によせて～

2018年8月28日（火）～12月9日（日）

瀬戸内市民図書館

瀬戸内市邑久町虫明の長島には、長島愛生園、邑久光明園という2つの国立ハンセン病療養所があります。長島と虫明の本土をつなぐ「邑久長島大橋」は、今年、開通30周年を迎えました。

本展では、あらためてハンセン病問題を考えるため、関係資料を展示しながら、現在進められているハンセン病療養所の世界遺産登録を推進する運動についてもご紹介します。

長島のハンセン病療養所

現在、全国にはハンセン病の国立療養所が13カ所設置されています。そのうちの2ヶ所が、瀬戸内市邑久町虫明の長島にある長島愛生園と邑久光明園です。

長島愛生園は、全国で最初に設置されたハンセン病の国立療養所です。1930年（昭和5）に開所式が行われ、翌年から患者の収容が始まっています。初代園長には、光田健輔が就任しました。

邑久光明園は、大阪にあった外島保養院（そとじまほよういん）が前身です。外島保養院は、2府10県（大阪・京都・兵庫・奈良・三重・和歌山・滋賀・岐阜・福井・石川・富山・鳥取）の患者を収容する公立の療養所で、1909年（明治42）に開所しています。

1934年（昭和9）9月の「室戸台風」で壊滅した外島保養院は、翌年、長島を復興の地と定められ、1938年に「光明園」として開園しました。その後、1941年に国立に移管されて「邑久光明園」となり、現在に至っています。

邑久長島大橋

（おくながしまおおはし）

療養所のある長島と、虫明の本土を結ぶ橋が「邑久長島大橋」です。入所者たちの長い運動の末、ようやく橋が架けられました。

邑久長島大橋は、隔離を強制され、差別と偏見に苦しんできた入所者の人権と名誉を回復する意味も持ち、「人間回復の橋」と呼ばれています。橋は1988年（昭和63）5月9日に開通しました。全長185㍎、有効幅員7㍎、アーチ型の橋です。



消毒用に穴がつけられた 投票箱

右の写真は、選挙のときに邑久光明園の投票所（邑久町第10投票区投票所）で使われた投票箱です。箱の側面に消毒用の小さな穴がつけられています。

邑久光明園と長島愛生園では、「らい予防法」第18条にもとづいて、投票済みの投票用紙が入った投票箱を、密閉加圧容器内で薬剤消毒していました。

最後に使われたのは1995年4月に行われた岡山県議会議員選挙のときで、邑久町選挙管理委員会の資料によると、同年6月に、次の選挙からは消毒を行わないことが決められています。

翌年（1996年）4月には、「らい予防法」が廃止されました。

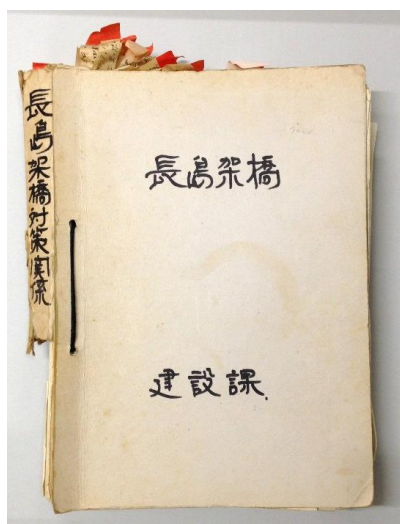


邑久長島大橋架橋関係の資料

（旧邑久町役場資料）

背表紙に「長島架橋対策関係」と書かれたファイルには、邑久町による長島架橋促進の陳情書などが収められています。陳情書は、昭和56年（1981）5月、邑久町長木下友次、邑久町議会議長坂本二郎の連名で、各方面に陳情を行ったときのものです。その内容は、岡山県編集の資料集『長島は語る 後編』資料266（492～493頁）に掲載されています。

「長島架橋関係綴」と書かれたファイルの中には、邑久町が昭和58年（1983）6月に開催した「長島架橋説明会」に関する記録などが収められています。この説明会の様子は『長島は語る 後編』資料273（501～504頁）に紹介されています。



光田 健 輔（みつだけんすけ）瀬戸内市名誉市民

明治9年（1976）1月12日、山口県防府市生まれ。東京帝国大学病理学教室選科を卒業後、東京市立養育院に勤務し、ハンセン病患者救済の第一歩を踏み出しています。大正3年（1914）、多摩全生病院長に就任。昭和5年（1930）、国内初の国立療養所である長島愛生園が開設され、初代園長に就任しました。

日本のハンセン病政策に大きな発言力を持ち、「救らいの父」と呼ばれました。昭和26年7月文化功労者、同年11月には文化勲章を受章。防府市名誉市民、邑久町名誉町民、岡山市名誉市民となっています。昭和39年（1964）逝去。享年89歳。没後、正三位勲一等瑞宝章を受章。

現在では、国の強制隔離政策を推し進めた人物として批判の対象ともなっていますが、療養所の入所者には光田を慕う人も多く、評価は分かれています。



園内通用票（えんないつうようひょう）
昭和5～23年（1930～48）
長島愛生園歴史館所蔵

逃走防止のため、入所者は通常のお金を持つことができず、愛生園内の売店のみで利用できる特別なお金を使用した。



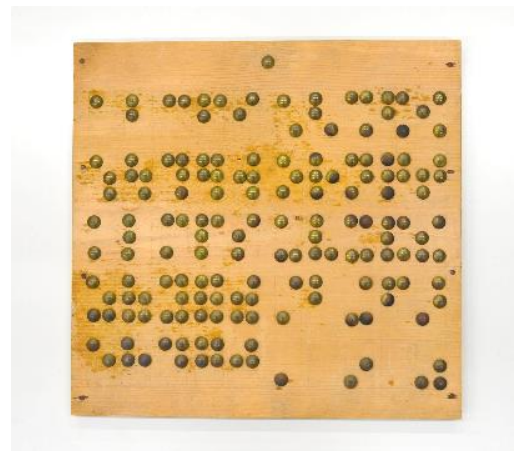
柄付きカンナ
長島愛生園歴史館所蔵

ハンセン病の後遺症の一つ、運動神経の麻痺により、指先が動かなくなった人も多かった。
このカンナは、患者作業により建物の建築を行った際に使用された。



点字練習板（てんじれんしゅうばん）
長島愛生園歴史館所蔵

ハンセン病の後遺症の一つ、運動神経の麻痺により、まばたきができず、失明する人も多かった。
この点字板は点字習得のために使用された。



二重湯呑（相馬焼）
（にじゅうゆのみ・そうまやき）
長島愛生園歴史館所蔵

ハンセン病の後遺症の一つ、知覚麻痺の影響で火傷してしまうことが多い。
この湯呑は二重になっており、熱が外に伝わらないようにしている。かつては入所者が制作していたが、現在は相馬焼の湯呑を購入している。

